魔法少女☆きゅぴるん！

森野樹海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女☆きゅぴるん！

【Ｎコード】
Ｎ９３３９Ｌ

【作者名】
森野樹海

【あらすじ】
突然空から降ってきた魔法少女。
彼女は不思議な力で巨大化して、怪人と戦う。
負けるなきゅぴるん！
立ち上がれきゅぴるん！
というお話。

第1夜　『敵襲、犬人間！！』

「こうなったら変身じゃ！」
幼女は叫んだ。右手には杖。それを振り上げる。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　へ～～～～んし～～～～～～ん！！」
そして幼女は光に包まれた。

魔法少女☆きゅぴるん！
第1夜　『敵襲、犬人間！！』

その日、ボクの家に幼女がやってきた。正確には降ってきた。
運悪く二階建ての二階にあったボクの部屋、その屋根を貫いて彼女は現れたのだ。その衝撃は屋根を破壊し、ベッドを吹き飛ばした。当然、ベッドに寝ていたボクは、ゴミ屑のように転がる。瀕死である。
そんなボクを見下ろして、幼女は言った。
「姓は露梨、名は紺という。ぜひ紺ちゃんと呼んでくれ」
血だるまになっているボクが目に入っていないのだろうか。ここは名乗るよりも先に助けを――具体的には救急車を――呼ぶべきだろう。人道的に考えて。
しかし、幼女に人道なんてものはないようだった。動かないボクを足で小突いて、ビクビクと痙攣する様を楽しんでいる。
その姿はまさに悪魔であった。
「妾の名をフルネームで読んだら殺すからな。そういうわけで、よ

ろしく、ぼうや」
身長は１２０といったところだろうか。そんな幼女にぼうやと言われてもな。大人になりたい年頃なんだろうか。
しかし、そろそろ意識がやばい。死ぬ。
「おやおや、妾が殺す前に死ぬのか。哀れなことよのう……」
できることならコイツを殺してから死にたかった。しかしボクの儚い願いは叶いそうになかった。小指の先すら動かないのだから。
そんなボクを毛虫でも見るような目で見ながら、幼女はその手にした杖を振り上げた。その杖は、木刀のような形をしていた。というか、木刀だった。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　唾液よ、エリクサーにな～～れ！」
意味不明な奇声をあげたのち、幼女はボクに唾を吐きかけた。それはまるで巷のヤンキーのような、美しい所作であった。鬼の仕打ちである。
しかし、驚いたことにボクの傷がみるみる治っていった。骨が折れ、内臓が破裂した、まさに致命傷であったはずなのに。
吐きかけられた唾液が、本当にエリクサーであったとでもいうのだろうか。
傷がなくなり、健康体となったボク。
「ありがとう。たすかったよ、ロリコン」
爽やかな笑みを浮かべて、左手を幼女に差し出す。幼女はその手を左手で握り。
ボクらは同時に右ストレートを放った。

ボクらが肉体言語でその親睦を深めている頃。街はそれなりに大変なことになっていた。
巨大な謎の生物が街を襲っていたのである。
ビルほどの巨体。その身体は人間そのもの、しかし、首から上は犬そのもの。こういう手合いもある意味で美しいと思って神が造っ

たのだろうか。なんとも恐ろしい犬人間が、街を火の海に変えていたのだった。
「あれは犬人間のアイゼンシュバルツァーじゃな。奴も人間界に落ちてきたというわけか、厄介なことじゃ」
なにその名前だけかっこいい人。存在自体はひどいもんだけど。
「あれもお前の仲間かよ。じゃあ責任もってなんとかしろよ」
「わかっておる。言われんでもなんとかするわい」
そして、幼女改め――紺は、杖を掲げた。実に嫌な予感しかしない。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　しゅ～～んかんいどーーーー！」
そしてボクの視界は暗転した。

気づくと、ボクらは見知らぬビルの屋上にいた。
目の前にはボクの身長の三倍くらいの犬の顔。死んだ。これはもう助かるまい。だってほら、アイツ涎たらしてこっち見てるし。
「わんわん、キャイン、バウバウ、アウウウン」
「キャンキャン、ワンワン、ガルルル、キュウウン」
そして隣の幼女は犬人間となにやら犬語らしきもので会話しているようだった。こいつの怪しげな交渉しだいで、ボクの生死が決まるのかと思うとやるせない気分になってくる。
そして。
「キタロウ、だめだった。奴は完全に正気をなくしているようじゃ」
こいつはなぜかボクのことをキタロウと呼ぶ。ちなみにボクの名前は森野葱市。一文字もかすってない。さすが幼女だ。ちなみに『そういち』と読む。ネギではない。
しかし傍から見ると、紺のほうが正気を失っているように見える。犬人間と犬語で会話する幼女。おかしいのはどう見ても幼女の方だ。
「だめだったって……ボクたちはこれからこいつに食われる運命なのか？」

「ふふん、妾は魔界一の魔女じゃ。こんな犬人間ごとき三秒でフルボッコじゃよ」
「そうか……ボクはここで死ぬのか……」
実に短い人生だった。死にかけて、なんとか助かったと思ったらまた死ぬのか。ボクがサイヤ人だったら戦闘力が二倍になってたのにな。そしたらあんな犬なんか……倒せないか。所詮一般人（戦闘力５のゴミ）が二倍の力を手に入れたとしても、つよいゴミ止まりだよな。たぶん車にも勝てないだろうよ。
「何を勝手に諦めておる。この大魔道士を信じよ。奥の手をつかう」
そう言って、紺はニヤリと笑った。

「変身じゃ！」
紺は叫んだ。右手には杖。それを振り上げる。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　へ～～～～んし～～～～～～ん！！」
そして紺は光に包まれた。

「デュワッ！」
幼女がでっかくなった。犬人間と同じサイズ、つまりビルほどの巨人になった。巨人なのに幼女。ボクはまたひとつ真理に近づいた気がした。
その幼女（紺）が、ボクを鷲掴みにして空中に放り投げた。三度、死を覚悟するボク。
「パイルダーーーーーオーーーーーーーーン！！」
そしてボクは幼女に食われた。
喉を通り、食道を通り、胃に到達する。そこには、ロボットマンガにでてくるようなコクピットがあった。
３６０度の視界を確保するモニター。二つの操縦桿。コクピット全体から、紺の声が聞こえてくる。
「どうじゃ、これが魔法少女☆きゅぴるんじゃ。妾は巨大化に魔力

を使っていて上手く動けないので、操縦は任せたぞ」
「え、これで戦うの？　ボクが？」
「お前以外に誰がいる。安心しろ、そこはコクピットであり妾の胃じゃ。五分でお前は消化される」
「結局死ぬんじゃねぇかあああああ！！」
ボクは絶叫した。生きながら消化されるとか、とんでもなく嫌な死に方だ。あのまま落下してたほうが楽に死ねただろうに。
「さぁ、死にたくなかったら五分であいつを倒すがいい」
それは脅迫だった。こんな腐った根性の幼女がいていいんだろうか。
しかし、ボクはまだ死にたくない。
頬を引きつらせながら、ボクはそのシートに座った。
汗ばむ手で、操縦桿を握る。
モニターに映るのは、狂ったように涎を垂らす犬人間。
ボクは目を閉じて、天を仰いだ。
そして、戦いが始まったのだった。

つづく！

第2夜　『死闘、犬人間！！』

「さぁ、死にたくなかったら五分であいつを倒すがいい」
それは脅迫だった。こんな腐った根性の幼女がいていいんだろうか。
しかし、ボクはまだ死にたくない。
頬を引きつらせながら、ボクはそのシートに座った。
汗ばむ手で、操縦桿を握る。
モニターに映るのは、狂ったように涎を垂らす犬人間。
ボクは目を閉じて、天を仰いだ。
そして、戦いが始まったのだった。

魔法少女☆きゅぴるん！
第2夜　『死闘、犬人間！！』

前回のボクはあえて描写を避けていたのだが、どうにもその描写を避けては通れない場面らしい。本当に残念だ。見たくないものからは、永遠に目を逸らして生きていきたいというのに。
首から上は犬。犬種は柴犬だろうか。とても厳つい顔である。問題は首から下であった。黒のビキニなのである。ムキムキの筋肉ダルマが黒のビキニを着ているのだ。しかもそれは、１８禁ギリギリの極小サイズ。視界にアレが映るたびに吐き気がする。恐ろしいほどの精神攻撃だった。効果はバツグンである。
正直、あんな化物に勝てる気がしない。
「ぶ、武器はないのか？　お前は素手で殴りあう魔女っ子なのか…

…？」
（安心しろ、ちゃんと魔女っ子に相応しい武器が標準装備されておる）
紺の声がコクピット内に響くと、カメラが勝手にきゅぴるんの右手へとフォーカスされた。メインモニターに木刀を握った右手が映し出される。
「これ？　これがお前の武器？」
（魔女っ子といったらコレだろう。常識じゃ）
紺の言う魔女っ子とは、どうも田舎のヤンキー（絶滅種）のことを指す隠語のようだった。きっと魔界とやらで広く用いられている隠語なのだろう。
そんなくだらないやり取りをしている間に、犬人間が目前に迫ってきていた。そして、無抵抗に顔面を殴られる。
よく考えたら、こんな魔法少女ロボットの操縦方法なんてさっぱりわからないので、当然の結果だった。回避どころか、歩くことさえできないのである。これはもう死亡確定だな。
（痛い痛い痛い痛い、これは死ぬ。お前少しは避けるとかしろよボケ！）
ひどい暴言だった。しかしこれは半分くらいはボクのせいなので、甘んじて受けるしかない。いや、半分もボクのせいなのか？　八割くらい紺のせいじゃないか？　やっぱり理不尽な暴言だった。
「これどうやって動かすんだよ！？　操縦桿動かしてもどこも動かないぞ！」
（気合と根性で動かせ。その操縦桿は飾りだ。雰囲気が大事なのだ）
「うわあああ！　やっぱりボクは溶けて死ぬんだあああああああ！！」
絶望した！
しかし、その絶望もまた、気合と根性の一種だったらしい。ボクの絶叫に反応して、きゅぴるんの木刀が犬人間に対して振るわれた。まさに奇跡が起きた瞬間だった。

首を狙って振られた凶悪な奇跡を、犬人間は左腕でガードした。
ボギャ、と耳障りな音を発して、その腕が折れる。
しかし、犬人間はまったく怯まなかった。目を血走らせて、その鋭い犬歯をきゅぴるんに向けてくる。コイツに痛覚はないのか？
瞬間、木刀が爆発した。
（こんなこともあろうかと杖にＴＮＴを仕込んでおいて正解だったわ！！）
はしゃぐ紺に、頬を引きつらせるボク。木刀にＴＮＴを仕込む？
どうやって？　まるで意味がわからない。
爆発を顔面付近で受けた犬人間は、哀れなほどに瀕死だった。モニターにモザイクが掛かっているのでどれほど悲惨なことになっているのかはわからないが、直視できないほどグロテスクなことになっているのは間違いなかった。
（キタロウの意見を取り入れて、新機能をついかしたのだ）
「ほう」
（敵の局部かグロ描写のうちどちらかを選択してモザイクをかけるマスキング機能じゃ）
「それは助かるな。出来ることならあの黒ビキニにもモザイクがほしいんだが……」
（それはできん。この機能はランダムじゃ）
実に使えない機能だった。モザイク機能があるなら、最初の黒ビキニの時点で使っていてほしかった。もう手遅れだが。ボクの精神はもうすでに汚されてしまったのである。
こうしてボクは、碌に操縦も出来ないままに初戦を白星で飾ったのだった。
時計を見る。消化開始まで残り二分。気づかなかったが、それなりにギリギリの状況ではあったらしい。
と。
犬人間の体が、赤く輝きだした。
（やばい！　自爆じゃ！！）

「自爆！？　なにそれこわい」
（魔界の住人がこの世界で瀕死のダメージを負うと、なぜか爆発して木っ端微塵になってしまうのじゃ！）
まさに恐怖の設定だった。魔界の住人とやらもいろいろと大変らしい。
そして犬人間は美しく爆炎を上げて吹き飛んだ。ドクロを形作ったキノコ雲が、彼の死を演出する。まさに敵怪獣に相応しい最後だった。

「戦いって……むなしいな」
（諸行無常じゃのう）
そこには巨大なクレーターがあった。ビルが立ち並んだオフィス街は、見るも無残に吹き飛んでいた。訴えられたら、まず間違いなく敗訴である。きっと一生を奴隷のように働いても返せないような額を請求されるに違いない。生き残っても人生終わるとか、酷すぎだろ。
「なぁ、紺。このコクピットはお前の胃にあるんだろ？　どうやってでればいいんだ？」
あと一分で消化が始まる。あれ、勝っても死ぬの？　話が違う！
訴えてやる！
（上から出るのと下から出るの、どっちがいい？）
恐ろしいことを言われた。しかし、下から出るのだけは何としても避けなければならない。人間としての最後の尊厳を守るために。
「上からでお願いします！　何でもしますからどうかお願いします！」
泣いていた。ボクは泣いて懇願していた。

なんとか無事にきゅぴるんから出ることが出来たボク。その過程は割愛させていただく。尊厳のために。上から出た、とだけは言っておこう。

「しかしこの惨状……ボク達は歴史的なテロリストになってしまったな」
「うむ。さすがにこれはまずいな」
どうやらこの幼女にもその辺の常識はあったらしい。
「よし、妾がなんとかしよう」
そう言って木刀を天にかざす紺。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　記憶よ、都合良く改竄されろ～～～！」
ひどい呪文だった。荒みきった大地をなんとかしようとしないあたりにも悪意を感じる。

こうしてボクらの最初の戦いが終わった。
しかし、第二、第三の犬人間はきっと現れることだろう。
戦え、きゅぴるん！
負けるな、きゅぴるん！
僕らの街の平和を守るんだ！！

つづく！

第3夜　『恐怖、ミカン大臣！！』

「俺の名前はミカン大臣。地球をミカン植民地にしてくれるわ！」
『きゃー！　たすけてー！　きゅぴるーーーーん！！』
紺の洗脳によって、疑問を抱くことなくきゅぴるんを受け入れた民衆が、助けを叫ぶ。
「無駄だー！　俺は無敵のミカン大臣だぞ！　きゅぴるんなんぞ一捻りだわーい！！」
戦えきゅぴるん！
負けるなきゅぴるん！
さぁ、お前の出番だ！！

魔法少女☆きゅぴるん！
第3夜　『恐怖、ミカン大臣！！』

地球は平和だった。
犬人間が残したクレーターは、紺の洗脳によって虚ろな目になった人々が不眠不休で復興させた。あれから一月、街はすっかり元通りだ。
どれほどの人間をムシケラのように酷使すれば、あの街が一月で復興するというのだろか。小僧のボクにはまったく理解できないし、したくない。間違いなくただの地獄だろうから。
この一月の間、魔界とかいう怪しい世界から、再び怪物が現れることはなかった。世界はとても平和だったのだ。
なので、このボクの油断は誰も責めることはできないだろう。
朝、テレビをつけると、街でミカンの化物が暴れていた。大量の

ミカンが集合して、人の姿を形作っている。間違いない、あれは紺の知り合いだろう。
「なぁ、あれってやっぱり……」
「言うな。分かっておる」
やっぱりコイツの知り合いだったか。こめかみを押さえて、溜息をつく紺。哀れな背中である。
犬の次はミカンか。ロクな知り合いがいないこいつ。この調子じゃまともな知り合いはいないんだろう。残念な交友関係だ。
「キタロウ。貴様、今、妾を哀れんだだろう？」
「いや、まさか。しゃべるミカンと知り合いだなんて尊敬しちまうぜ」
「怒らないからお姉さんに正直に言ってごらんなさいな」
「お前の人生終わってるよな」
しまった。これは誘導尋問だ！
気づいたときには遅かった。木刀がボクの鼻先を掠めていく。よかった、さすがに木刀で顔面を殴打するなんて非常識なことはしなかった！
瞬間、鼻血が噴出した。まるで華厳の滝のような、雄大な景観がそこには広がっていることだろう。残念ながらボクには見えないが。
「うぼあああああアアアアアアアァァァァァァ！！」
「おやおや、妾の艶姿に欲情したか？　やはりおヌシはサルよのう」
その時ボクには、間違いなく殺意が目覚めていた。今ならこのロリババァを瞬獄殺できるかもしれない。まさに殺意の波動である。
「ははは、ごめんごめん、仲直りをしよう。ほら、握手」
キラキラと星の舞うような笑顔で、左手を差し出すボク。もちろん鼻血を撒き散らしながら。これ、止まらなかったら死ぬんじゃないのか？
「うむ……妾も少しやりすぎたかもしれぬ……」
殊勝にもそんなことを呟いて、左手を握ろうとする紺。コイツも根はいいやつなんだよな。人間界に来たばかりで、ちょっと戸惑っ

てるだけなんだ。
そして、硬い握手を笑顔で交わすボクら。
もちろん、その眩しい笑顔に向けて、二人は同時に右ストレートを放っていた。

ビルの屋上に、ボクは立っていた。鼻に大量のティッシュを詰めた情けない姿がそこにはあった。肉体言語の使用により、傷はさらに深まっている。
そして、目の前には巨大なミカン。
「みかんみかんみか～～んみかん？」
「みみみかん。みかんみかんみかんみん」
これがミカン語なのだろうか。たぶん言葉をなぞるだけならボクにも出来るだろうが、その意味を理解することは永遠にできないだろう。宇宙の深遠を覗いた気分である。
「キタロウ、だめだった。奴は完全に正気をなくしているようじゃ」
真顔で紺が言う。よく考えればテレビで見たときあのミカンは日本語をしゃべっていた。ならミカン語じゃなくてもいいんじゃん。日本語でいいじゃん。ボクにも分かるように話せよ。
「こうなっては仕方あるまい。殺そう」
とても幼女とは思えない判断の早さだった。本当にあのミカンは正気をなくしているのだろうか。この幼女が、自分に都合の悪いものを消そうとしているだけなのではないだろうか。
ボクの邪推を打ち消そうとするかのように、紺は杖を振り上げ叫んだ。
「暗殺！　滅殺！　大☆喝☆采！！　へ～～～～んし～～～～～ん！！」
そして紺は光に包まれた。
「シュワッチ！」
ビルを超えんばかりの巨人になった紺。有無を言わさずボクを鷲

掴みにして空に放り投げる。
「パイルダーーーーーオーーーーーーーーーン！！」
ボクは抵抗すら出来ずに、再び幼女に食われた。
喉をすべり、食道をすべり、胃へ。そこにはあの現実感のないコクピットがあった。ボクはまた、消化に脅えながらあのシートに座らなければならないのか。ある意味、電気椅子より恐ろしい椅子である。
しかし、ここまで来たら座らないわけにはいかない。なぜなら、それ以外にこの地獄の空間からの脱出方法がないからである。
（準備はいいか小僧。あやつは分裂しての攻撃を得意としておる。惑わされずに核を攻撃するのじゃ）
なんとも難しい注文をつけてくる紺。未だにボクはきゅぴるんをまともに動かすことすら出来ないのだ。核を狙うなど、高等技術ができるはずがない。歩くことさえできるかどうか……。

モニターに映るミカン大臣が弾けた。まるで散弾銃のように、拡散して襲い掛かってくる。初見のボクには、自爆に見えた。ミカン大臣なんてものが初見じゃない地球人はいないと思うが。
しかし困った。まともにきゅぴるんを動かすことも出来ないのに、こんな化物に勝てるわけがない。人類の発展も、今日ここまでか。
無抵抗に棒立ちなきゅぴるんに襲い掛かるミカンの嵐。しかし、きゅぴるんは無傷だった。むしろ、幾つかのミカンが潰れて、きゅぴるんの装甲を汚している。
（バカめ！　ミカンごときが妾に傷をつけられるものか！）
分裂を止め、再び巨人の姿に戻るミカン大臣。確かに幾つかのミカンが潰れた程度ではダメージはないらしい。
「やるではないかきゅぴるん！　ならば必殺のデススパイラルタイフーンキックをお見舞いしてくれるわ！！」
なんとも恐ろしさに欠ける技である。呆れるボク達の前で、ミカン大臣が空に飛ぶ。なるほど、上空から蹴りを放つというわけか。

スーパーイナズマキックというやつだな。
　しかし、阿呆のような名前とは違い威力はありそうなので、このまま黙って直撃をくらうわけにはいかない。
「おい、紺。アイツ飛びやがったぞ！　きゅぴるんは飛べないのか！？」
（安心しろ。魔界の女王たる妾が空ごとき飛べんはずがない）
「どうやるんだ？　どうやって飛ぶんだ！？」
（まずは左手で首の裏の服のようなパーツを掴む。そして……持ち上げる！）
「ほう、それで？」
（なんということでしょう！　身体が浮くではありませんか！！）
「浮くわけねえええだろおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
　そしてボク達はデススパイラルタイフーンキックを直撃した。衝撃で吹き飛び、ビルを二つほど薙ぎ倒して止まる。正直、死んだと思った。
（ぐう……このままではまずいな。こちらも必殺技を使うか）
「そんなもんあんなら最初から教えろよ！」
（これはとても危険な技なのじゃ）
「そんなにか？」
（無論じゃ。この技はパイロットに負担がかかり、最悪死に至る……）
　ゴクリ、と息を呑む。
　コイツがこれほど躊躇するということは、それほど危険な技ということか。しかし、このまま何もしなくてもボクは死ぬ。具体的には消化されて死ぬ。
　そうであるならば、危険を冒してでも勝利を掴むべきだ。
「教えろ、紺！　それはどんな技なんだ！？」
（お前を弾丸として射出する極殺兵器だ）
「最悪どころか間違いなく死ぬだろうがあああああああああああ！！」

（よし、発射準備完了！　キタロウ、いつでも逝けるぞ！！）
「や……やめろ……正気に戻れ……神の刃は人類の愛のはずだろ？
話し合えば、きっとわかりあえるはずだ……」
（ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ）
徐々にコクピットが上昇していく。必死にもがくが、シートベルトがボクの逃走を全力で拒んだ。
そして、コクピットはきゅぴるんの口内まで昇って止まった。
（キタロウ、チャンスは一度じゃ！　外すでないぞ！！）
「チャンスなんかねえよ！　間違いなく死ぬよ！！」
正面には、肉眼で確認できるミカン大臣。
（いっけえええええええええええええええええええ！！）
「うわあああああああああああああああああああああ！！」
そして、ボクは星になった。

つづく！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9339l/

魔法少女☆きゅぴるん！

2010年10月15日03時06分発行